

## 西田真人 年譜

1952	昭和 27 年		神戸市に生まれる
1978	昭和 53 年	26 歳	京都市立芸術大学日本画科を卒業 第 15 回日春展《独り》初入選
1980	昭和 55 年	28 歳	神戸市展《子守り》一席市長賞受賞
1986	昭和 61 年	34 歳	セントラル日本画大賞展《THEATER》入選 第 5 回京都山総美術公募展《夜の教会》佳作受賞
1987	昭和 62 年	35 歳	兵庫県展《剥》一席兵庫県立美術館賞受賞
1990	平成 2 年	38 歳	第 22 回日展《廃屋》初入選
1992	平成 4 年	40 歳	第 6 回青垣 2001 年日本画展《碧い入り江》兵庫県知事賞
1993	平成 5 年	41 歳	青塔社入塾 池田道夫に師事 「印象神戸」絵画展《暮れゆく街》市民賞受賞
1994	平成 6 年	42 歳	第 40 回全関西美術展《光る海》二席受賞
1995	平成 7 年	43 歳	第 41 回全関西美術展《倒壊》佳作受賞 第 27 回日展《黒いアーケード》特選（文化庁買い上げ）
1996	平成 8 年	44 歳	第 30 回現代美術選抜展《黒いアーケード》出品
1997	平成 9 年	45 歳	個展「神戸 光 祈り」神戸阪急・京都大丸・東京東急 第 14 回山種美術館賞展《更地》優秀賞受賞 半どんの会文化賞現代芸術賞受賞、兵庫県芸術奨励賞受賞
1998	平成 10 年	46 歳	第 30 回日展《静まる刻》特選 グループ「NEXT」結成、京都高島屋グランドホールにて 平成 19 年（10 回展まで）まで発表
1999	平成 11 年	47 歳	第 33 回現代美術選抜展《静まる刻》出品
2000	平成 12 年	48 歳	神戸市文化奨励賞受賞
2001	平成 13 年	49 歳	個展「神戸 時 輝き」神戸阪急・東京三越
2002	平成 14 年	50 歳	東山魁夷記念日経日本画大賞展《雨の街》入賞
2003	平成 15 年	51 歳	第 35 回日展審査員
2006	平成 18 年	54 歳	第 6 回菅橋彦大賞展《彩》大賞
2007	平成 19 年	55 歳	兵庫県文化賞受賞
2008	平成 20 年	56 歳	京都市立芸術大学日本画研究室教授に就任 神戸市文化賞受賞、個展「季節を飾る」神戸大丸 第 40 回日展審査員
2011	平成 23 年	59 歳	「KOBE・モノクロームの眺め」西田真人日本画下絵展

### ギャラリー 日本画家・西田真人が描いた阪神大震災 出品作品

番号	作品名	制作年	技法・材質	寸法	出品
1	暮れゆく街	1993	紙本著色	112×162	「印象神戸」絵画展
2	光る海	1994	紙本著色	162×224	第40回全関西美術展
3	倒壊	1995	紙本著色	145.5×194	第41回全関西美術展
4	白い壁	1996	紙本著色	116.7×91	
5	風の声	1996	紙本著色	145.5×194	
6	明暗	1996	紙本著色	97×194	
7	虚ろな窓	1996	紙本著色	80.3×116.7	
8	虚ろな窓（写生）	1995	クレパス・紙	32.5×47.6	
9	黒いアーケード（小下絵）	1995	混合技法・紙	22.0×21.9	
10	瓦礫の街（小下絵）	1995	混合技法・紙	18.1×26.1	
11	光のアーケード	1996	紙本著色	191×192	第28回日展



## ギャラリー

### 日本画家・西田真人が描いた阪神大震災

今年 3 月 11 日に起きた東日本大震災。その深刻な被害には言葉を失います。神戸もまた平成 7 (1995) 年 1 月 17 日の阪神・淡路大震災で大きな被害を受けました。

神戸出身の日本画家・西田真人 (1952～) は当時、震災一ヶ月後から被災地の写生を始めたそうです。「生々しい写真や映像は、もう十分なほどあるものの自分なりの受けとめ方で絵画化することで、なかば義務として、なかば墓標を刻むような思いで作品にいたしました」(『神戸 光 祈り』より) と後日語り、表現者として震災にどう向き合うか、悩みながら行動した様子が伝わります。

本展では震災前の神戸風景と、被災した下山手カトリック教会を描いた《白い壁》、長田区菅原市場に取材した作品等 11 点を展示します。これらの大部分は平成 9 年に神戸・京都・東京の個展で発表後、平成 10 年度に当館へ寄贈されました。



西田真人《暮れゆく街》1993 年 紙本著色

平成 23 年 (2011) 12 月 10 日 (土)～平成 24 年 (2012) 2 月 19 日 (日)

休館日：毎週月曜日 (ただし 1 月 9 日は開館)、12 月 29 日～1 月 3 日、2 月 14 日 (火)

### 神戸市立博物館 2 階ギャラリー

〒650-0034 神戸市中央区京町 24 TEL 078-391-0035

同時開催：特別展 日本絵画のみみつ〔会期：12 月 10 日 (土)～1 月 22 日 (日)〕

開館時間：午前 10 時～午後 5 時 (金曜日は 7 時まで開館、入館は閉館 30 分前まで)



《光る海》1994年

## ＜西田真人氏、語る＞

芸大を卒業後、神戸に帰ってきて、昇外義先生の作品を見て衝撃を受けた。線と色だけでここまで描く（岩絵の具を使わなくてもすばらしい絵ができることに）。お人柄も私とあったのか、30代前半頃、月に一度絵を見てもらうようになった。さらに現場でしっかり写生しようと心がけた。

薄塗りの画面にすると、描き込んで絵画的に密度を濃くしていかないといけない。池田遙邨の画塾（私

が入塾した時は池田道夫先生が代表）、青塔社に入塾し、勉強した。

イタリアは憧れの地で、芸大を卒業してから2回訪れた。ヨーロッパの歴史を感じさせる重厚な風景に圧倒され感激し、絵を描きたくなった。1回目は道具を持っていってなかったので写真を撮り、帰国後、写真から描きおこした。2回目は写生のために行った。

細部をとらえるには写真の方が、効率が良い。しかし、写真をそのまま使っている訳ではない。イギリスへは震災の年の3月に材料を仕入れるために初めて行った（10回訪英）。

私は、形をそのまま描くので表現力が弱い。絵画的なレベルを維持するために、色彩とかモチーフが醸し出すポエジーを重視し、普遍性を持つものにしたいと考えている。本画の数だけ下絵がある。制作の一部に写真を使うことに負い目があるから、下絵の段階で免罪符のように描き込む。下絵で徹底的に説明的な描写をしてしまうことで、その後の感覚的な作業も自信を持ってできるように思え仕事がやりやすくなった。

見たとおりに描くなら、人にやってもらってもいい。でも、自分で描いていくと、やはりこれは無い方がいいとわかる。描きながら整理整頓作業を加えていっている。小下絵も何枚か描いてイメージを固める。色を最終的にきれいにしようと思うと、完成イメージをしっかり持つことが重要。本画はオブラートがかかって、主観的になっていく。

もともと、震災前から廃墟やうち捨てられた風景が好きで描いていた。不謹慎だけど震災風景は非常にドラマティックで、心が動いた。最初、1ヶ月ほどは遠慮していた。写生などしていたら、いい感じを持たれないのではないかと思った。でも毎日、現場を歩いて、神戸に住んでいて、絵を描いているのに何も描かないのはかえって怠慢かなと考えた。

当時、板宿の高校（須磨学園）に勤めていたが、校域が広く、交通が寸断されていたので授業は昼からだった。午前中に学校の近くへ写生に行った。暗い中を車で現場まで行き、一つの現場で2～3時間くらいかけて描いていた。クレパスや鉛筆で。

震災後2ヶ月経つときれいに更地にされてしまったので、実質、描いたのは1ヶ月。描いていると、被災された方が、こういうことも大事だなと言ってくれて励みになった。

当時、個展を開催する話があり、最初ヨーロッパ風景を出すつもりだったが、神戸で大震災があった以上、これを主題にすべきではと考え、写生のなかから絵画的に成立するものを7点ほど絞り、本画制作した。池田遙邨は関東大震災に取材した《災禍の跡》が文展で落選したが、私は日展で《黒いアーケード》が特選を貰い、時代が変わったとの新聞評もあった。

震災前に描いた風景もあった。救いも必要と思い、最後はルミナリエを描いた。仏像を描くのも、いかにも日本画的で抵抗があったけれど、やはり救いが欲しく、神戸にある仏さまを多く見せてもらい描いた。それで自分なりに個展を組み立て、評価して頂いた。

デパートも神戸を応援しようと協力的だった。自分も作品を売る必要がなかったので、純粋に神戸を応援する気持ちで描けた。

過日、全国の一宮神社を描く仕事を引き受けた。10年くらいかけて制作する予定。スコットランドへ行くようになって、原始からの岩が削られてそのままになっているような山の風景に普遍性があると感じる。岩肌などを執着して描く。西洋のテイストを感じさせる東洋山水とは違った山水画を目指している。山水画は心象風景でもあるが、西洋的な写生を加味することでそこにリアルさを求めたい。

（2011年11月19日 こうべまちづくり会館にて取材）



《倒壊》1995年



《白い壁》1996年



《風の音》1996年



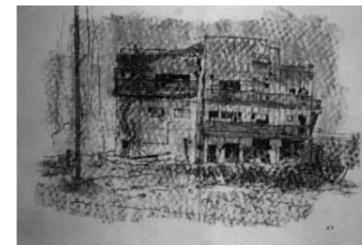
《瓦礫の街（小下絵）》1995年



《明暗》1996年



《虚ろな窓》1996年



《虚ろな窓（写生）》1995年



《黒いアーケード（小下絵）》《光のアーケード》1995年

